

飯豊山地におけるベニヒカゲ *Erebia nipponica* の生態的知見 (II)

草刈広一

〒999-1201 山形県西置賜郡小国町沼沢 1 8 5

Ecological notes of *Erebia nipponica* in mountainous of Iide

Kouichi Kusakari

Numazawa 185, Oguni Town, Nishiokitama-gun, Yamagata, 〒999-1201

はじめに

ベニヒカゲが豊産する飯豊山地の草月平 (1960m, 御西岳～駒形山間) で 2017 年 8 月 17 日に観察を行った。また同年 9 月 16 日にカイラギ小屋から地神北峰までを往復しながら同種の出現調査を行った。筆者 (2015) は同地域でオスが集合し翅を広げたまま葉上で回転し合うタップダンスの様な行動や交尾行動について記録したが、今回、同種の生態に関する新たな観察記録を得たので、報告する。

ベニヒカゲの出現期間について

2017 年 9 月 16 日、カイラギ小屋から地神北峰までをベニヒカゲの出現調査したところ、アサギマダラ、ヒオドシチョウ、キアゲハ、それにミヤマカラスアゲハと思われるアゲハチョウなどに混じって、飛び古した個体 (地神山付近) を 1 頭目撃した (雌雄は不明)。これまでの最も遅い出現記録は草刈 (2014) の天狗の庭における 9 月 15 日 (2014 年) で、その記録は飯豊山地にとどまらず、山形県内での最も遅い記録であったが、今回はさらに 1 日記録を更新した。

ベニヒカゲの獣糞への吸汁と集合性について

2017 年 8 月 17 日、草月平の登山道沿いのタテヤマスケ葉上に、5 頭が集合しているベニヒカゲ集団に遭遇した (図 1, 2)。その集合状態は 3 分程であった。筆者の気配により次々飛び去ったが、葉上にオコジョと思われる獣糞があり、図 1 中の右下の翅を閉じている 1 頭は、そこにとどまり吸汁していたと推定された。他の飛び去った個体は、いずれもオスと思われる、それらが吸汁している個体に対して割り込んで吸汁しようとする行動は見られなかった。中央下の個体も中央横に張り出したタテヤマスケの葉を伝って右側に移動する程度で、吸汁行動は確認できなかった。

ベニヒカゲの集合性に関しては、オスの集団によるダンス様行動(草刈, 2015)のほか、同じく飯豊山地内で、天候の急変時、岩の割れ目に多数の個体が集まって避難していた事例も確認されている(草刈, 2014)。飯豊山地以外に2017年8月23日、南アルプス農鳥岳東面大門沢(2100m)において、2頭のオスがマルバダケブキに訪花しているのを目撃した(図3)。1頭は著者の気配により飛び立ったが、まわりに同じ花が多く咲いていたにもかかわらず、残った1頭は吸蜜していた花に戻ってくる動作を数回繰り返した。

増村多賀司氏は、2017年8月26日、北アルプス後立山連峰新越山荘付近で、オコジョ死体のそばにあった糞に、ベニヒカゲのオス2頭が飛来し、翅を拡げて吸汁している写真をフェイスブックに掲載している。

今回の観察結果と既報の情報から本種のオスに集合する習性があることが示唆されている。前報のように飯豊山地では多数のベニヒカゲの集合例が確認されているが、集合場所には獣糞はなかった。今回の5頭の集合も、きっかけは最初の1頭の獣糞への飛来であったと思われるものの、その後集まったオスがすべて翅を拡げ、オレンジ模様をパッチワーク状につなげ目立たせ、メスを引きつけるための生殖行動で、獣糞への吸汁行動ではなかった。

飯豊山地の草月平の個体群は、規模が大きいものの、チシマザサ草原やハイマツ、ツツジ科主体の矮性低木によって周辺の生息地との連続性が断たれている。付近には矮化したヌマガヤ草原が散在し、ショウジョウスゲなども生育するものの、いずれもベニヒカゲの食草になっている可能性は低く、また、キンコウカやイワイチョウなどの群落周辺でベニヒカゲの飛翔をみることは稀である。主要な食草と思われるヒロハノコメススキ、ムツノガリヤスや



図1 集合する5頭の飯豊・草月平のベニヒカゲ(2017年8月17日11:19撮影)

図2 図1中央下の個体が歩いて右端に移動(2017年8月17日11:20撮影)

図3 マルバダケブキに訪れた南アルプスのベニヒカゲ(2017年8月23日撮影)

右側の個体はいったん飛びたったあと同じ花に戻る動作を繰り返した。

オオヒゲガリヤスなどのノガリヤス類、タテヤマスケが草月平に多いが、飯豊山地において本種の食草がなんであるかは未確認である。一方、タカネマツムシソウなどのベニヒカゲの吸蜜植物が豊産するが、風衝地が判別できるほど恒常的な強風地帯であり、探雌飛翔時に風に飛ばされる危険やエネルギーの消耗を回避する対策として、オスが集まってメスにアピールするという習性が獲得されたのかもしれない。

おわりに

ベニヒカゲをはじめ、高山蝶の生態について御教示いただいた、ふじのくに地球環境史博物館の高橋真弓先生に深くお礼申しあげます。

引用文献

草刈広一 (2015) 飯豊カイラギ小屋昆虫記 出羽の虫 10:73-82

草刈広一 (2015) 飯豊山地におけるベニヒカゲの生態的知見 越佐昆虫同好会報
113:45-49